214

#### きつま こく ふ 薩摩国府跡

(川内市国分寺町字杉山・西原・石走島・迫田・中當田・前迫, 御陵下町字 入来原・権現脇・栗野ヶ迫・下原・兵庫原・大薗・前田・日駒・中原)

### 位置と環境

遺跡は、市の中心部から北側に約2kmのところにあり、標高13~15mの通称国分寺台地と呼ばれる台地上に立地している。遺跡の広がりは国分寺町・御陵下町にまたがる六町(654m)四方の広さに及ぶものである。国府跡の東側には、薩摩国分寺跡が隣接し、北西約1kmには越ノ巣火葬墓が存在する。

### 調査の経緯

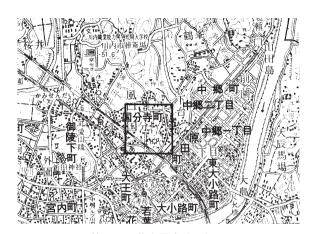
調査は、これまで3回の調査が実施されている。 昭和39年(1964)には、川内高等学校教諭平田信 芳らにより御陵下町入来原(写真1)の調査が行わ れ、この付近一帯が国府域の一部であることが推定 されるに至った。

当初,調査は川内高等学校の手により行われていたが,この遺跡の重要性に注目した鹿児島県教育委員会は,昭和40年(1965)・42年(1967)の2次にわたり調査が行われた。

## 遺構と遺物

昭和39年の調査(第2図人)では、3間×3間の建物跡の礎石群(第3図)が検出され、奈良時代末期から平安初期にかけてとみられる瓦・土師器等の遺物が出土した。

昭和40年には、建物跡の礎石群が検出された地点の西側において入来原第2地点(第2図回)、杉山地点(第2図回)の3地点での調査が実施された。大薗地点では、遺構・遺物の存在は確認されず、入来原第2地点と杉山地点の2地点に絞って調査が実施された。この2地点は、国府推定域の北端にあたり、約230mの距離を隔てて一直線上に並んでいる。入来原第2地点では、直径4mの隅丸方形の竪穴住居跡を検出し、これに伴い奈良時代後期のものと見られる境・坏等の土師器が出土した。杉山地点では、東西に走る瓦列とこれに沿った溝状の遺構(築地



第1図 薩摩国府跡の位置

跡?)を検出し、これにより国府北部境界が推定されるに至った。この築地跡と見られる遺構内からは奈良時代後半を主体とする瓦や土師器等の遺物が出土した。

昭和42年には六町四方の国府推定域の中心部国衙推定域(二町四方)を中心に計6か所の調査が実施された。このうち国衙推定域(大薗・石走島)の北隣の西原A地点(第2図A)からは奈良時代から平安時代にかけてとみられる建物の柱穴跡が出土した。これに伴い土師器・墨書戯画土器・須恵器・緑釉皿・越州窯青磁・風字硯・滑石製石鍋・金銅製金具等の遺物が出土した。(第4図)同地点が国衙推定域の北隣に隣接することやこれらの出土遺物からこの地に国府の重要な付属建物があったと推定されている。また,西原B地点(第2図B)からは「國厨」と記された墨書土器が出土している。(第4図)

#### 特徴

従来,薩摩国府の位置については江戸時代に成立 した『三国名勝図絵』により現在の国府推定域から 約1km北西の御陵下町屋形ケ原(屋形原)とされて いた。

これを覆すきっかけとなったのが県立川内高等学校による学校周辺の字絵図の調査であった。その後川内高等学校・鹿児島県教育委員会による計10か所の調査により、国府域がほぼ確定し、出土遺物等から薩摩国府は奈良時代後半から平安時代後期にかけてこの地において機能していたらしいことが判明し現在に至っている。

この国府跡と並行して薩摩国分寺跡の調査も実施

されたが、国分寺跡についてはその後整備が実施され昭和60年(1985)に国指定史跡薩摩国分寺跡公園として開園した。一方、国府跡については昭和40年代の調査以降はほとんどその調査が実施されていないのが現状である。

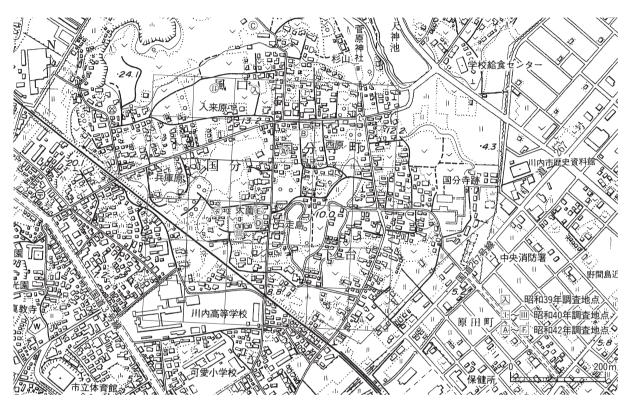
# 資料の所在

出土遺物は、川内市教育委員会(昭和39年)、鹿

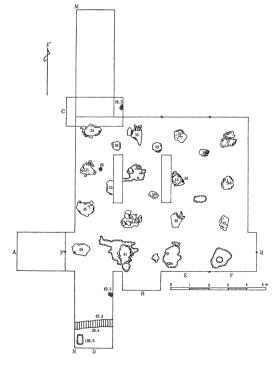
児島県立埋蔵文化財センター(昭和40・42年)に保管されている。

## 参考文献

鹿児島県教育委員会1975『薩摩国府跡・国分寺跡』 川内市教育委員会1985『国指定史跡薩摩国分寺跡環 境整備事業報告書』 (前 幸男)



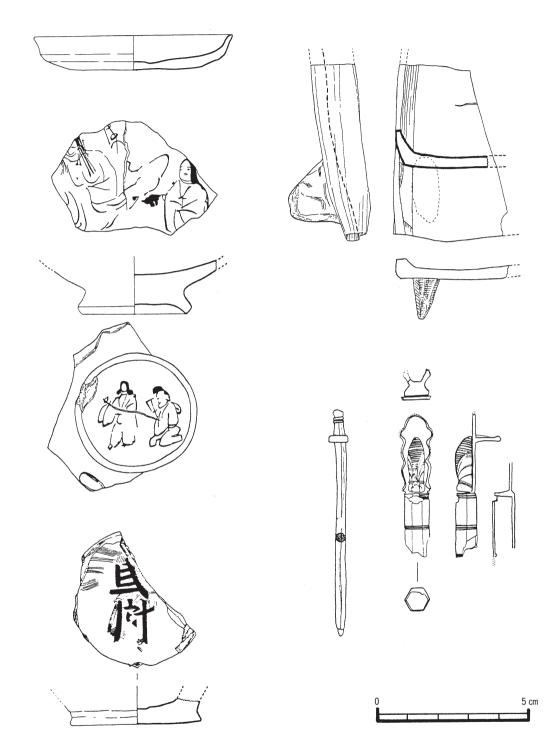
第2図 薩摩国府推定域



第3図 入来原建物跡



写真1 現在の入来原(昭和39年調査)付近



第4図 出土遺物